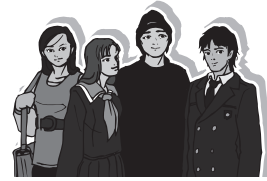


～少年とともに～



付添人体験記

— 真実を語ってくれない少年 —

志賀 野歩人 (65期) ●Nobuto Shiga

1 事件の受任

その日は、多摩支部子どもの権利に関する委員会の会議のため、弁護士会多摩支部会館に来ていた。会議も終わって、事務所に帰ろうかという時に、事務局から、ぐ犯の少年事件の派遣依頼がきているので、子どもの権利委員のどなたかにお願いしたいという話があった。おそろおそろ手帳を開くと、綺麗に予定が空いている。私が「お引き受けいたします。」と言うと、他の先生がたが、ホッとした様子で笑っている。

2 少年への疑念

さて、やるからにはしっかりやらねばと気合を入れ直して、初回面会に行かねばならない。配点日の翌日、鑑別所の接見室に入ってきた少年は16歳の高校1年生だが、身長は私よりも高く、体もがっしりとしていた。少年は友人と新宿歌舞伎町のゲームセンターにいる時、突然警官に声をかけられたということだ。いくら平日の日中とはいえ、ゲームセンターにただで警官に声をかけられたというのは不自然だと思った。そして、なぜ逮捕されたのかと聞くと、手書きのメモを持っていたからということだ。その内容はよく覚えていないという。それを聞いた瞬間、私はすぐに「オレオレ詐欺の受け子」だと理解した。ところが、少年はオレオレ詐欺はやっていない。

そのメモは直前に知らない男から渡されたと言い出した。

少年の言い分は明らかに不合理だし、オレオレ詐欺の受け子役の嫌疑は濃厚だ。しかし、初回面会で少年を問い詰めるわけにもいかなないので、とりあえずその日は少年の言い分を聞くことに徹することにした。

3 両親との関係

少年の話では、少年の両親は半年ほど前に離婚し、現在は母親と生活している。家には1週間程帰宅しておらず、母親からも搜索願いが出されていた。もっとも少年は、これまで前歴も補導歴もない。少年は中学時代に陸上部で全国大会にも出たことがあり、高校もスポーツ推薦で入学した。しかし、高校に入って、持病の腰痛が悪化し陸上に打ち込めなくなり、部活を辞めていた。部活を辞めてからは学校がつまらなくなり、辞めたいと思うようになった。学校を欠席しはじめ、中学時代の友達と遊ぶようになった矢先での今回の逮捕であった。

少年との初回面会の2日後に両親と面会した。もともと少年の進学先は母親を選んだこともあり、母親は学校をどうしても続けてほしいと考えていた。私は、それが少年を家から遠ざけるきっかけになったのではないかと感じた。ただ、これまで見てきたぐ犯少年に比べれば、両親との関係は良好であると言えるのではないかと、それが、私の率直な感想であった。

4 犯罪の確信

翌日、私は裁判所で法律記録の閲覧をした。そこで、少年の口からは語られなかった事実がいくつか発覚した。手書きのメモの内容、少年が逮捕時にスーツを着ていたこと、友人が持っていた偽名の記載された偽造免許証

等々。私は少年がオレオレ詐欺を行っていたことを確信した。

しかし、そのことを少年に聞いても、少年はスーツは家出をする際に父親の服を着て出てきた、友人が持っていた免許証のことは知らないと言いつづけた。少年は、家出をしたこと、学校を無断で欠席していたこと、母親を心配させたことには心を痛め、深く反省していた。ただ、それでもオレオレ詐欺をしようとしていたことだけは決して認めなかったのである。

私は、少年自身の発言を否定することはしなくなかった。少年事件を起こす少年は、周囲の大人が自分の話を聞いてくれない、信じてもらえない、という思いを多かれ少なかれ持っている。それは自業自得といえればそれまでののだが、付添人も同じでは、少年は他の大人と同じように付添人を遠く感じてしまう。

とはいえ、今回の少年は非行性が進んでいないからこそ、事件をどう受け止め、反省をするかが、少年の将来にとって重要になる。少年がこのままシラを切り通し審判を受けても、おそらく保護観察となり自宅に帰るだろう。だが、それでは少年はいつか小金欲しさに同じ失敗をしてしまう可能性が十分にある。

5 少年への働きかけ

私は、記録を読んだ翌日に調査官と面談をした。調査官の感想も私と同じだった。このまま、シラを切り通すことが少年にとって良くないと考えていたのだ。

そこからは、私も調査官もなんとか少年に本当のことを話してもらおうと面会を繰り返した。私は、あくまで少年のことを信じているという建前で、一般論として、少年事件では、何をやったかだけではなく、少年自身がしっかり事件を受け止めて反省できているかを裁判所は見ている、今の言い分だと裁判官には信じてもらえないかもしれないし、反省していないと思われるかもしれないよ、と翻意を促した。

6 告白

それでも、状況は変わらぬまま、審判の1週

間前になった。その日は私は別件で東京にはいなかったが、調査官から急ぎの連絡があった。その日の面談で少年がオレオレ詐欺をしようとしていたことを認めたというのだ。決め手になったのは、共犯者が全てを認めて、調書を作成したということで、調査官からそれを聞いた少年はすぐに罪を認めたのだ。

私は翌日、鑑別所で少年と面会した。少年は心なしか前回の面会よりも清々しい表情だった。少年は何度か私に本当のことを話そうと悩んでいたと言った。ただ、共犯者や、さらに少年らに犯行を指示した先輩のことを庇っていて、言い出せなかったということだった。

私は、改めて少年がオレオレ詐欺という重大犯罪にかかわっていたことの意味、あと一歩のところまで詐欺犯になっていたことの恐ろしさを少年に話した。

7 その後

少年は審判で素直に自分のやったことを認め反省した。審判には母親だけでなく父親も同席し、少年の監督を誓った。

少年は保護観察となり、自宅に戻っていった。結局通っていた学校は審判の翌日に退学になった。しかし、1か月後に母親と私の事務所を訪れて、通信制の学校に入学したことを報告してくれた。そして、今でもその学校に通っているということだ。

8 感想

この事件では結果的に少年はしっかりと更生してくれた。しかし、私は結局、少年から真実を語ってもらうことはできなかった。あと一歩ではあったが、やはり自分の未熟さを痛感させられた事件である。成人事件でも否認事件の向き合いかたは非常に難しいが、特に少年事件において、少年の心に寄り添い、信頼関係を守りながら、それでも少年が自分の行為と向き合えるように語りかけることは今後も考えていかなければならない課題である。

■